

# 二見中だより 第3号

(職員から、「校長先生、こんな記事がありました」と紹介してもらいました。感銘を受けましたので、文字ばかりになってしまいましたが、頑張って読んでください)

## 今は耐えるとき、<sup>しんし</sup>真摯に<sup>けいこ</sup>稽古の<sup>じしゆく</sup>自粛を

インタビュー「ejudo」編集長 古田英毅 回答 東海大学柔道部監督 上水研一朗

—8月末まで東海大学柔道部の解散措置をとったのは本当ですか？  
事実です。4/1解散を宣言し、3日までに学生を実家に帰して寮を閉鎖しました。

—判断の背景を教えてください。  
大学の方針に則りました。私たちは大学傘下の組織ですからこれに従う以外の選択はありませんし、何よりこれが適切な処置だと思っています。

—大学の判断について。  
教授会で試算が出ました。6月から9月にかけて東海大学病院で感染者を何人扱うことになるか、大学職員に何割の感染者が出て、そのうち何%が死亡の恐れがあるかの予測がシビアに提出されました。あくまで最悪の事態想定ですが、これが判断の根拠です。

—全日本学生優勝大会延期の判断前に既に解散していたわけですね。  
(※東海大学は6月の同大会に5連覇をかけていた)私はこれは戦争だと思っています。世界は戦時です。大会や柔道は確かに大事なのですが、命あつての物種。**今は命を守る行動を優先する**しかありません。戦争のさなかで柔道はできません。まずは生き残らなくては何も始まりません。

—部員に与えた生活上の指針は？  
十分に体を鍛えて免疫力の高い東海大柔道部員がウイルスに感染して重症化することは考えにくい。ただし**それで事態を甘く見て周りの命を奪うことや、危険に晒すような行動は決してあってはならない。大事な人間を死に至らしめたり、社会を壊**

**す、医療崩壊の片棒を担ぐというようなことは、絶対あってはならないのです。**ここは我慢。社会全体が我慢するときです。**柔道関係者が感染を広げたら、今後「柔道」というジャンルが社会から受け入れられなくなってしまう。**柔道人全体の賢さが試されていると思います。

—東海大柔道部が率先して解散を決めたことは大きなインパクトがあったと思います。大学の方針に沿ったわけですが、うちがやらないと、どこもやらないという思いもありました。繰り返しますが、今は皆で我慢するとき、賢さを試されている時だと思っています。

(以下 古田氏)

この期に及んでもまだ大学で活動できないから外に出て稽古をする。他校が休んでいる今がチャンスと指導する指導者や公共施設の閉鎖で個人道場を借りて指導する指導者がいる。しかし、コロナウイルス**騒ぎの後、柔道が社会に受け入れられるのは「彼らは競技の特性を理解し、社会崩壊を防ぐため、理性的な行動をとった」という評価のみ。**稽古ができる元気な若者に感染リスクが少ないのは誰もが知っている。死ぬのは彼らではなくその行動による感染拡大を受けた弱い立場(高齢者など)の人たちと医療崩壊で受け入れてもらえなかった人たちだ。「柔道」がそんな役割を演じてはいけない。『**自他共栄**』。上水氏の言葉は改めてそれを教えてくれる。

—どうでしょう？『**武道は戦うためにあるのではない、戦いを避けるためにある**』という恩師の言葉を思い出しました。



エール大助教  
成田 悠輔

神新聞  
20/4/12

新型コロナウイルスの感染拡大により、各国政府による渡航やイベント、店舗営業などの規制が広がる。日本と米国を往復する身にとつてとりわけ移動の制約による不便さを実感している。

米国で4~5月に参加を予定していたイベントはすべて中止となり、スタンフォード大学やエール大学の自分のオフィスも使用禁止となった。

米国の空港は厳しい入国審査で乗客の大行列ができ、手続きに数時間かかることがあるという。こうした混雑がさらに感染を広げる悪循環が懸念されている。

国を行き来する障壁が一気に高くなり、太平洋に突然、かつての「ベルリンの壁」がそびえ立ったかのようだ。トランプ大統領は2016年の大統領選で「米国を守るため国境に壁を敷く」と公約したが、こんな形で実行されるとは誰も予想しなかっただろう。

だが、過去の歴史を振り返ると、

### 経済サプリ ピンチをチャンスに

悪い知らせの後は良い知らせがあることも忘れてはならない。感染を思い起こされるのが17世紀のペスト大流行で、大学の校舎、研究室から閉め出された一人に若きアイザック・ニュートンがいた。物理学者で数学者、天文学者で知られるニュートンが「万有引力の法則」「微分積分学」「光学」を考案したのが、まさに隔離期間中だったと言われている。帰郷が偉業に結びついたのが、当時のことは「創造的休暇」とも呼ばれるという。科学だけではなく、災禍をきっかけに生活や仕事の見直しが進むことがある。なくても困らない点が明らかになり、無駄を解消し社会や組織、企業などの仕組みを作り替えることにもつながる。

今回の事態で不安とともに煩わしが募るが、日常と離れたところで仕事や生活を見つめ直す機会にできるのではないか。われわれもピンチをチャンスに変える努力をしようではないか。